

アイヌ語地名って面白い！

ー松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を辿る観光コース造成の試み



ガイドによる解説



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリイ国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

* 共催：旭川市教育委員会、後援：北海道上川総合振興局、アイヌ語地名研究会、美瑛町、上富良野町、（一社）旭川観光コンベンション協会、松浦武四郎記念館（三重県松阪市）、大雪山カムイミントラジオパーク構想推進委員会、十勝岳ジオパーク推進協議会、井村屋グループ株式会社（三重県津市）、NPO法人環境ボランティア野山人、トカチルウチを歩く会、美瑛町郷土資料保存会

はじめに

一昨年（2018年）は松浦武四郎による北海道命名150年であり、その足跡と業績は北海道遺産にも指定されました。また、松浦武四郎の物語が昨年NHKでドラマ化されるなど関心が高まっています。本稿は、松浦武四郎の旅のストーリー及び、その記録に登場するアイヌ語地名が場所の地理情報と一致しているという特徴に注目し、ウォーキング中心の観光コースを造成した試みについての報告です。この企画は、北海道観光振興機構「令和元年度地域の魅力を活かした観光地づくり推進事業」として実施しました*。武四郎の旅のコースをフットパス化しているところは既に何か所ありますが、アイヌ語地名の解説を加えたコースというのは本事業が初めてです。

きっかけは、当センターが自主事業としてアイヌ語地名研究会（代表 北海学園大学名誉教授 藤村久和 氏）に依頼し、5年に亘り実施しているアイヌ文化や地名の勉強会の成果を役立てることができのかもしれないと考えたこと、また一昨年、長きに亘り不明となっていた、武四郎が現在の旭川から美瑛、上富良野を経て十勝に抜けたトカチルウチシルートがほぼ解明され、そのルートを実際に歩き通した方達がいるという新聞記事を目にしたことです。トカチルウチシルートというのは富良野岳と前富良野岳の間の鞍部にあたる標高約1,359mの峠で、アイヌの人々は、この峠を越えて石狩側から十勝に抜ける鹿の季節移動の道を積雪期の近道として利用していました。毎年武四郎が旅をしたのと同じ残雪期、トカチルウチを歩く会（代表 山谷圭司氏）により実施されている体験ツアーにも昨年参加しました。沢筋から尾根への急登など、コースの様子は武四郎の十勝日誌にあるとおりで、その旅を追体験している気がするとともに、武四郎が草鞋履きでアイヌの案内人の助けを得ながら険しい道を旅した苦労が偲ばれました。ルウチ（またはルーチシ）という峠の名前も、アイヌ語でルウは道、チシは急な登りを意味しているという解釈もあるので、確かに場所の情報を示すアイヌ語地名は、文字を持たなかったアイヌの人々にとっては地図の役割を果たしていたということを実感した次第です。

対象地域

本企画は、北海道を6回訪れた松浦武四郎の旅のうち、1858年（安政5年）第6回目の十勝日誌に記録された行程の一部地域、具体的には旭川市神居古潭及び美瑛－上富良野間（美瑛の丘）を対象としました。十勝日誌の旅は石狩に始まり、トカチルウチシを越え、十勝のオホツナイ（現在の豊頃町、大津）で終わります。この地域を対象としたのは、旭川市には随所にアイヌ語地名の解説板があるなどアイヌ語地名の研究が進んでいること、美瑛の丘は既に道内屈指の観光地であるため観光ルート化しやすいと考えたからです。また、歩かなければアイヌ語地名と各場所の特徴を照合したり、武四郎の旅を追体験することが難しいので、ウォーキングを中心とするツアーとしました。

想定した利用者

本コースの利用者としては、国内、道内の歴史やアイヌ文化に関心のある旅行者や後述する欧米を中心とするアドベンチャーツーリズム（AT）の旅行者を想定しました。北海道はいわゆる伝統的な日本文化や歴史資産は本州に比べると少ないですが、武四郎の北海道探検は江戸期に行われており、その膨大な旅の記録を通してアイヌ民族やその文化、北海道の自然についての情報が幕府や諸藩に伝えられたという点で、歴史ファンにも興味深いと思われます。

アイヌ語地名ガイド育成

アイヌ語地名の理解にはアイヌ語地名と場所の特色との関連性を説明できるガイドが必要であり、ガイドするためには初歩的なアイヌ語地名の学習を要するので、10月のモニターツアーに先立ちガイド育成のための講習（座学と現地でのデモンストレーションツアー）



図1 十勝日誌のルート

を実施しました。座学での講習は、9月1日旭川市博物館を会場として、アイヌ語地名について学びました。神居古潭部分の講師は旭川新聞に「旭川のアイヌ語地名」の連載記事を執筆しているアイヌ語地名研究会幹事の高橋基氏、美瑛－上富良野のいわゆるトカチルウチシへ至るルートについては上富良野在住の彫刻家で、不明になっていたトカチルウチシのルートをほぼ解明した山谷圭司氏が解説しました。アイヌ民族は文字を持たなかったため、現在アルファベットで表記されているものの表現に地域差があり、表記法も不統一、訳も辞書ごとに相当異なっています。その結果、アイヌ語地名についても解釈が分かれ、決着がつかないままになっているものが多々あります。このため、ガイド講習では複雑な解釈論には立ち入らず、なるべくわかりやすい解説にとどめるようにしました。また、アイヌ語は1つの言葉が複数の部分から成り立っており、各部分の意味を合わせたものが言葉全体の意味となります。例えば、神居古潭の神居岩、アイヌ語のクツネシリは、[岩崖 ku をなしている ne 山 sir]、近文の語源となったアイヌ語チカフニは[鳥 cikap 居る un ところ i] という具合で、実際オジロワシが今でも営巣しています。

神居古潭は、松浦武四郎の旅の記録以外にもアイヌの魔神伝説を物語る奇石が数々あり、伝説にまつわるアイヌ語も紹介されました。

ガイド養成講習には札幌、旭川、富良野、美瑛地域から20名（関係者を除く）が参加。表1は、参加者の内訳と講習についての評価です。

座学でのアイヌ語地名の学習を実地で学ぶため、さらに、旭川市教育委員会の友田哲弘氏、山谷圭司氏を

講師として、9月28日、29日の両日現地でデモンストラーションツアー（以下デモツアー）を実施しました。28日の旭川市内は関係者を含め13名、29日は美瑛、上富良野地域からの参加が多く20名が参加しました。行程は後述のモニターツアーとほぼ同じで、両日とも好天に恵まれました。特に、美瑛－上富良野間23kmを歩いた21日は雲ひとつなく、作物の違いから農地の色合の丘陵地帯が次々と変化していく景色は見事です。途中、武四郎も何枚も写生を残している場所があります。ここからは、天塩岳から表大雪連峰、十勝山系全て、ふり向くと夕張、芦別岳まで360度見渡すことができます（残念ながら農地の真ん中なので通常は立ち入れません）。距離が23kmと長く、参加者のなかには80代や70代後半の方が3～4人いましたが、皆さん健脚で、脱落した方は一人もいませんでした。

表1 ガイド講座参加者内訳と評価 N=20

9月1日ガイド講習参加者総数 20名		
男女比	年齢構成	
男性 15	30代	2
女性 5	40代	5
	50代	5
	60代	5
	70代	2
	未回答	1

講習会の評価（1～4）	
1-良くなかった	2-まあまあ良かった
3-良かった	4-とても良かった
	評価平均
わかりやすさ	3
資料の内容	3
興味深さ	3

旭川市内、美瑛－上富良野の各コースの座学を半日ずつとデモツアーの結果、評価の平均は3（良かった）、参加者のなかにガイドをしてみたいという気持ちになったと回答した方が7名ほどいて期待がもてました。

モニターツアーの行程

1日目（10月19日）

札幌→神居古潭～神居古潭・魔神伝説のある奇岩（魔神の頭）など見学～忠別太一番屋跡～道の駅（昼食）～旭川市博物館～立岩（底なし沼跡）～チカップニ～嵐山（チノミシリ）～クーチンコロ・松井梅太郎碑～川村カ子トアイヌ記念館見学・体験～旭川市内泊

2日目（10月20日）

旭川市→JR美瑛駅～北西の丘～美瑛川一置杵牛川合流点～新栄の丘（武四郎写生地）～四季彩の丘（昼食）～富良野川～民宿ステラで休息～終点 日の出公園（レリケウシナイ・武四郎野営地）→札幌

モニターツアー

引き続き、事業の総仕上げとして、10月19、20日参加者を一般公募し、札幌発着のモニターツアーを実施しました。2日目は約20km歩く旨募集要項にも明記していたので、参加者が集まるか心配でしたが幸い東京や道内各地から30名もの方が参加、関係者も含め35名のツアーとなりました。アンケート結果から、参加者の多くはアイヌ文化やアイヌ語地名に関心のある方達でした（表2）。

表2 モニターツアー参加動機 N=30（複数回答）

松浦武四郎に興味があった	26
アイヌ文化について興味があった	23
アイヌ語地名について興味があった	17
歩くのが好きだから	14
神居古潭に興味があった	11
美瑛－上富良野の風景が好きだから	15
ツアー料金が割安だったから	11
その他	2

以下ツアーの詳細です。

1日目は札幌駅北口から出発、最初の見学場所である神居古潭に向かいました。車中では、高橋基氏が写真やビデオで神居古潭の解説、神居古潭から旭川市内の立寄り先のガイドは、旭川市教育委員会の友田哲弘氏が担当されました。

かつて神居古潭は道内有数の観光地でしたが、高速道路が整備されてからは立ち寄る観光客も少なくなっています。しかし、元々景勝地であることに加え、松浦武四郎が150年前に目にした自然は原型を留めており、十勝日誌、石狩日誌などでも紹介されています。例えば、武四郎が絵に描いた川中の大岩、レプシペ〔沖に rep いつもある us もの pe→岩〕やパラモイ〔広い para (poro) 湾 moy〕は、今も神居大橋から見るすることができます。加えて魔神伝説を伝える奇岩の数々など魅力的な素材が揃っています。漫画ゴールデンカムイの影響で神居古潭を訪れる人もいるとのこと。魔剣伝説に関連する底なし沼跡や様々な言い伝えのある立岩も興味深い場所です。また、旭川市博物館は、先史時代から縄文、擦文、アイヌ時代そして現代まで時系列的な展示内容となっていて、道内でも展示

の充実度は屈指です。嵐山（チノミシリ）はアイヌの聖地であるとともに、石器時代からの遺物が発掘されており、数千年に亘る人間の歴史が途切れなく刻まれている道内でも数少ない場所です。川村カ子トアイヌ記念館では皆さんアイヌ文様の切り紙体験に真剣に取り組んでいました。この日の予定はかなり欲張って詰め込んだため、参加者からはもっとゆっくりと見学したかったという声が多かったです。

2日目は、早朝旭川から美瑛に移動、地元ガイドの山谷圭司氏や小倉博昭氏、十勝岳ジオパーク推進協議会、美瑛町郷土史料保存会の皆さんと合流した後、バスで出発点の北西の丘に向かいました。デモツアーのときよりも日没が早まっていたので、行程を少し縮めて16kmのハイキングです。この日も、農家のご厚意で農地の中を歩かせてもらいました。

参加者の半数が70代でしたので、念のため地域からサポートカーが提供されましたが、1～2名を除き、皆さん16kmを歩き通しました。また、十勝岳ジオパーク推進協議会が、コース上のアイヌ語地名の重要地点に立てた、その地点までの歩行距離、目的地までの距離を記載した看板により、一層充実した旅となりました。途中からはお天気も回復し、参加者は素晴らしい美瑛の丘の風景を満喫しました。松浦武四郎がスケッチした場所に近い新栄の丘では、スケッチに挑戦したり、地元名産のジャガイモのおやつも出て楽しい時間となりました。そして、ついに予定通り日没直前に最終目的地の日の出公園に到着。記念に誰かが打ち鳴らした「愛の鐘」の音は、その昔武四郎がアイヌの人々と越えていったトカチルウチシにまで響きわたるかのようでした。参加者のアンケートへの回答結果も、アイヌ語地名ガイドの評価は、良くなかった1・普通2・良い3・とても良い4の評価で平均が3.4、料金につ

いては、モニターツアーの倍の2万円程度ならまた参加したいとの回答が15名、2万円以上でも参加したいとの回答が2名と半数以上が定価でも参加したいとの意向でした。距離も、「長すぎる」と回答した6名以外の24名からは「丁度良い」との回答を得ました。16kmでも相当の距離ですが、美瑛の丘の変化に富んだ風景を見ながら歩いていると疲れも忘れるということでしょうか。

おわりに

ガイド調達の見込み、モニターツアー参加者の参加動機、ツアー内容への高評価から、本ツアーコースは十分事業化が可能であるとの感触を得ました。また、神居古潭を含む上川アイヌの文化遺産は日本遺産とも重なっており、大雪山カムイミントラジオパーク、十勝岳ジオパーク構想の対象地域にも含まれているため、これらの要素もツアー内容に取り込むことができます。今年4月に開館予定の民族共生象徴空間ウポポイの来館者がアイヌ文化への理解をさらに深めようと、上川に足を延ばすこともあり得ます。道も2月末、三重県との間で、ウポポイオープンを機に松浦武四郎についての文化交流事業を活発化させていくことで合意しました。さらに、自然、異文化、アクティビティを要素とするアドベンチャートラベル（AT）の要件も備えているので、北海道のAT資源のハイライトである大雪山・十勝山系と本コースを組み合わせることにより、2021年秋に本道で世界サミットが開催されるAT向けのコースとしても様々なレベル設定ができ有望です。本コースのうち、観光客が立ち入れない農地を含む美瑛－上富良野間については、地元ガイドを帯同する場合に限りツアー実施を認める方向で検討されており、農業関係者もツアー参加者への季節の果物や野菜の有料提供に前向きです。このような方式を採用することにより、地域により多くの利益をもたらすことが可能になるのではないのでしょうか。

松浦武四郎は北海道全域をほぼ隈なく歩いているので、他地域でも武四郎の歩いたコースやアイヌ語地名を地域独自の資源と組み合わせて、個性的なツアーコースが開発されることが期待されます。

※本ウォーキングコースのパンフレットを製作しました。観光案内所等でどうぞ。



ポイントごとに立てられた案内板